
いい匂い

福野あや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いい匂い

【ZINE】

Z2272F

【作者名】

福野あや

【あらすじ】

愛の告白の返事が「無理」って…もつと言葉を選んで…。冷たくフられた私。けれどそこから始まる話もあつたりする、かも。短いよ！

好きだ、って、思った。

強烈に、鮮明に。

自覚してしまえば、あとは簡単。ハマつていいくだけ。

戻れない所まで突き進んで、もつアナタしか見えない！…つてなつたのに、肝心の返事は、

”NO”

（ふ…ん…。あ、そう。つるんだ？ つりやつんだ？ あ… しかもゴメンってなんだよ。謝られたいんじゃないんですけど…）

フラれた。

完全に、フラれた。

「好きです」って言つたら、

「無理です」って言われた。もつと、他に選べる言葉があるだらうが、と思つた。

悔しくて平氣なフリをしていたけれど、本当はギリギリだつた。一人になると決まって涙が流れた。

（…好きだつたのになあ…）

この世に生まれて22年。

初めての挑戦は失敗に終わった。

恋は、甘いことばかりではないと知つた。恋愛小説だつて、主人公は”この世の終わり”みたいな底まで落ちたりしてゐるのに、自分自身、あえて印象づけないよう読み流してたんだと思う。心臓の動悸が心地よくて、やたらと甘つたるいのが恋愛だなんて、ずいぶん勝手な解釈だ。

深く深く誰かを好きになるなんて、もつと大人になつてからのことだと思っていた。恋をするには、私はまだ、あまりにも幼稚なような気がした。

始まりは絶望。

つて、ちょっと大袈裟だけビ。

確かに私は、絶望していた。

社会人3年目にして思いきり転職した会社で、素晴らしい男に出会った。

私より1年先輩のその男は、顔良し、スタイル良し、背は高くないけれど、仕事ができておまけに優しい。

付き合っていた男と別れて半年。そろそろ一人がつまらなくなってきた頃だった。

無理矢理ではあつたものの、携帯の番号とメールアドレスも交換し

た。

仕事の用事にかこつけて電話をし、だんだんと彼についての話にすり替える。そこで仕入れた情報は、メモを取つて記憶する。そう、私は必死だった。

「今夜、空いてる？」

最初にそう声を掛けてきたのは彼だった。

私は驚きのあまり、手にしていた書類をハラハラと散らかした。

「空いてますけど？」

とつあえずそう答えて、バラまいた紙を拾う。さあ、次は？なに？なにがしたいの？一枚一枚拾い上げながら、次の言葉を一言一句聞き逃すまいと聴覚の全神経を彼に集中させていた。

「部長と総務課の課長が、呑みに行こうって。女の子いた方がいいかなっておもつたから」

「あ……そなんですか」

「店、まだだから、7時に駅前に」

「…わかりました」

彼が去つた後、大きくため息をついたのは言つまでもない。何の罪もない部長と課長が、邪魔くさくて仕方なく思えた。

何が好きって、見た目も確かに好きだ。

だけど、彼を思い出す時、真っ先に浮かぶ、”匂い”。

微かなコロンの香りに、煙草の匂いと、たぶん、汗の匂い。3つが絶妙なバランスで混ざつて、私の脳を痺れさせた。

過去に付き合つてきた男に、それはなかつた。だから今、私は彼を追いかけている。

正直、追うのは面倒だと思う。その時その時、好きだと言つてきた奴と、あるいは言われないけどなんとなくそんな雰囲気になつた奴と、付き合つてきた。

慣れない、どうしたらしいのかわからない。でもあの匂いの中に、私はいたい。これがわからない他の女が寄り付く前に、自分だけの匂いにしたかった。

（7時に駅前…）

時計を確認すると、6時15分を指していた。駅まで10分以内に行ける。残つてゐる雑務を片付けて、軽く化粧を直してゐる時間もある。

一人じゃないしな、と思つ気持ちをぐつと押し込んで、机に向かう。

5分前に着いた。

駅前の通りは仕事終わりのおひさん、〇一、学生らしき人達で賑わっていた。

（酔わないようにしなきゃな…）

私は酒癖があまり良くない。以前、社内の忘年会でガンガン飲んで、一次会のカラオケで騒ぐだけ騒いだせいで気持ち悪くなり、トイレまで間に合わないと言つて個室のごみ箱に胃の中身戻した後、ソファーを陣取つて朝まで爆睡したことがあった。最悪なことに、その場に彼はいた。しかしその後も飲み会がある時は声をかけてくれる。

（ほんと、気を付けよつ）

再び決意する。これ以上醜態を晒したくはない。

そんな思い出に浸つていると、人混みの中に見馴れた顔を見つけた。遅れて「ごめん、と、近付いてきた彼からは、やはり例の匂いがして、表情が緩む。

「部長達、もう店入つてるってさ」

そう言われてついていったのは、チヨーン店の大衆向けの居酒屋。

「ホッピーが飲みたかったらしいよ」

確かに、入り口には「デカデカとホッピーと書かれたのぼりが立っている。

「おお！遅いぞ！座れ座れ！」

先に入っていたという上司の一人は、すでに出来上がっていた。店員を呼んで、生ビールとつまむものをいくつか注文する。ここからは場の流れに任せる。にこにこ笑つて、時々酔っ払いの一人に酒を注いであげたり。それだけでいい。

飲み始めて数時間。

おっさん一人はベロベロになつて、意味不明な会話をしている。彼はそんな光景を二口二口しながら見ていた。私はダラダラとお新香盛り合わせをつまみながら、

（ちょっとほっぺが赤くなつてゐるな……）

などと、こっそり彼を観察していた。見えてるのがバレたら… と思い、時々視線を游がせた。

このままずつとまつたりしてみたい。そう思つた矢先に、おっさん
一人が

「カラオケ行くぞー」と騒ぎだした。

「どうぞ一人で行つてきて下さい私はここで彼と一人で飲んでますから、とも言えず、荷物をまとめて伝票を持った。

とりあえず彼と割り勘して会計を済ませる。もちろん明日の朝一、おはよう「わい」と言つより先に、酔っ払い上司一人に請求するつもりだ。

外に出ると夜風が心地よかつた。アルコールで上がった体温を穩やかにしてくれる。

「カラオケ、どうする?」

「…今日は、帰ります。明日も仕事だし」

もう少し、彼といたい。しかしそうした所で何があるわけでもない。それならせめて、落ち着いた気持ちのまま眠りにつきたかった。

「おー！何してんだ！早く行くぞー！」

肩を組んだおっさんが大声で手を振って呼んでくる。

「それじゃあ、お疲れ様でした」

私はそう言ひ残して背を向けた。

駅からマンションまで、歩いて15分かかる。飲んだ日はだいたいタクシーに乗るけれど、今日は歩きたい気分だった。パンバスのヒールがカシンカシンと軽快に鳴った。

間もなく23時になる。

帰つたらシャワーを浴びて、念のため胃薬を飲んで寝てしまおう。

そんなことを考えながらサクサク歩いていると、背後から足音が聞こえた。

速さからじて、走つてくるようだ。しかもどんどん近づいてくる。

夜中に、人通りの少ない道、というか、歩いているのは私だけ。色々な想像が頭を駆け巡つて、心臓が大きく跳ね出した。

(まさか、いや…ただのランニング中のおっさんかもしないし…！でも…違うかもしないし…ヤバい…もうダメかも…！…タクシー乗つときや良かった！まだ死にたくない…この若さで…勘弁してよ…やめや…！…！)

あまりに怖くて、足が止まってしまった。

そして足音は、私のすぐ後ろで止まつた。

恐る恐る振り返る。

と、

見覚えのある後頭部があつて、膝に手を当てて肩で大きく息をしていた。

(……？あれ？)

そーっと覗き込む。

心臓は、まだバクバクしている。

「… もん、歩くの早いねえ…」

そつと顔をあげたのは、さつき別れたはずの彼だった。

「え…あ…あれ？カラオケ、行つたんじや、な…いんで…すか…？」

「あー…あの二人、タクシーに押し込んできた。これ以上飲ませたら明日仕事になんないでしょ？」

「あ…あは、あはは…そ、ですよ、はは…なんだ…」

通り魔じゃなくて良かったのと、また彼に会えたのが嬉しかったのとで、さつきまでの緊張が解けてその場に座り込んだ。

「…よかつたあ…刺されなくてー…」

「なに！？刺され…え！？なんかあつたの！？」

「あはは…なんでもないです」

よいしょ、と立ち上がりつつ、パンプスが片方脱げてよろけてしまつた。

やばい、と思つたけど、転ばずに、ふわっと、あの、いい匂い。

「…大丈夫？」

「…は、はい…」

「酔つてんの？」

「あ…だ…大丈夫です」

彼は、支えられていた。

ヒツケヒ、ヒツケヒと離れた。あまつ恥ずかしさで口を開く。

(……やつぱつ酔つてゐかも)

「……ねえ」

と話掛けられて、顔をあげると、唇に柔らかい感触。

(……ん?)

頭に?が沢山浮かんだ。

「……から近いの?」

「……まー

「ちやんと帰れる?」

「……まー

「じやあ、また明日」

「……まー」

バイバイと手を振つて、彼を見送つた。

(…-…)

れつきの感触がなんだったのか、気付いた時には彼の後ろ姿は小さくなっていた。

やがて、彼は、彼の姿を失つた。

やつくり思い出してみると。

離れ際に、確かに聞いた。

『好きになつちやつた -

誰を？

何を？

私を？

22年生きてきた中で、今一番、混乱している。

落ち着け落ち着け。

そう自分に言い聞かせて、バッグから携帯を取り出す。電話帳を開いて彼の名前を探した。

少し迷つて、発信した。

呼び出し音が鳴り始める。落ち着かないまま、出るのを待つ。

『もしもし』

「あ……あの……」

『あうひつたの？』

「……いい匂い、ですね……」

(後書き)

お疲れ様でした。読んで下さりありがとうございました！何が言いたいのかとか、テーマみたいのはありません ただ、実話も少し入ります。どこかつて？ヒントは、グロッキーなエピソード…！ 次はもうちょっとマシなのが書きたいなあ… それでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2272f/>

いい匂い

2010年11月23日06時48分発行